一陽来復

猫目石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一陽来復

【Nコード】

N5837T

【作者名】

猫目石

【あらすじ】

りんが失踪して二年後。

楓の許に、ある人物が訪れる。

それは・・・

「りん・・・何処にいる」

しわがれた声が闇の中に落ちる。

薄べりを敷いた寢床に老婆が横になっている。
いつ何時であろうと変わらぬ紅白の巫女装束。

老人である楓の眠りは浅い。

一旦、床についても夜中に目が覚めることが往々にしてある。

そんな時、楓が心に思い浮かべるのは、やはり、りんの事だった。

ビュ〜ビュ〜と吹き付ける風が容赦なく隙間を通して家の中にまで入り込んでくる。

囲炉裏の火は、とうに燃え尽き火の気はない。

深々（しんしん）と冷え込む寒気の中、明り取りの窓から月の光が射し込んでいた。

皓々（こうこう）たる月の光、そういえば今宵は満月だった。

りんが失踪してから二年が過ぎた。

五年前、犬夜叉の腹違いの兄、殺生丸から楓に預けられた養い仔のりん。

預けられた当初、りんは、まだ幼女だった。

楓に取って因縁浅からぬかごめが娘なら、三年、共に暮らしたりんは孫のような存在である。

りんは月を眺めるのが好きだった。

夜になると何時も夜空を見上げ月を探すのが常だった。

それも誰もが好む大きな明るい満月よりも細い三日月を好んだ。

大好きな殺生丸の額を三日月が飾っていたからだろう。

そんな少女を思い出すたび老女の胸は痛む。

生きているのか、死んでいるのか、それさえも定かではないりん。

大雨の水が退いた後、必死に近隣を捜し歩いたが、少女の痕跡は何ひとつ見つからなかった。

生きているのなら、今直ぐにでも迎えに行つてやりたい。

もし、死んでいるのなら遺体だけでも手厚く吊つてやりたい。

りんを思つたび後悔と寂寥が楓を苛む。

昏間は、まだいい。

巫女修行の為、かごめが側に付いている。

楓に巫女としての仕事を頼む者、または薬師としての腕を頼る村人も来る。

日々の忙しさに忙殺され物思いに耽る暇はない。

だが、独りきりの夜になると、どうしても、りんの事を思つてしまふのだ。

かごめは、夫の犬夜叉とともに少し離れた場所に建てられた家に帰つていく。

りんの失踪当初、憔悴した楓を心配して、かごめと一緒に暮らそうと申し出てくれた。

しかし、楓から断つた。

あの頃、犬夜叉とかごめは所帯をもつたばかりの新婚だった。

それだけでなくも犬夜叉とかごめは三年も離れ離れになっていたのだ。やっと一緒になれた二人の蜜月を邪魔する訳にはいかなかった。

カサツ・・・小さな物音が外でした。

狐か狸だろうか。

ペタペタ・・・ペタツ・・・ペタペタ・・・独特の音が次第に近付いてくる。

バサツ、入り口の筵が持ち上がった。

意外な顔が覗き込んでいた。

「邪見ではないか。久し振りだな」

殺生丸の従者、邪見が緑色の小さな顔を見せていた。
矮小な体躯わいしょうたいくにキツチリと着込んだ水干と烏帽子えぼしが従者としての身分を主張している。
右手には片時も手離さない翁と女の頭が付いた奇妙な杖、人頭杖ひとかぶつじょうを握っている。
久しぶりに顔を見せた小妖怪は以前と同じように憎まれ口で老巫女に話しかけた。

「フン、お前は、随分と老いぼれたな、楓」

この小妖怪は相も変わらず口も悪ければ態度もでかい。
苦笑まじりに楓は言葉を返した。

「フツ、ご挨拶だな、邪見。女に向かって、そんな口を聞くものではない。如何にワシが媪おつひめであろうともな」

「ハンツ、そんなことはどうでもいいわい。今夜、ワシがワザワザ此処に来てやったのはだな、貴様に教えておかねばならん事があるからじゃ。フフン、良いか、楓、今からワシが話す事を聞いて腰を抜かすでないぞ」

「誰が腰を抜かすか。お主でもあるまいに。何だか知らんが勿体もったいぶらんと、さっさと話せ」

元々、邪見は筋金入りのお喋りである。
寡黙過ぎるほど寡黙な殺生丸の従者をしている関係上、主の代弁をする必要があるのは確かなのだが、如何せん、喋りすぎる傾向があるのだ。
いつも余計な一言を吐いては殺生丸から折檻されるのが常であった。今も話したくてウズウズしているらしい。
そんな邪見の胸の内を見透かして楓は話しやすいよう邪見に水を向けてやった。

「ムッ、では教えてやる。・・・生きておるぞ」

「誰がだ？」

「判らんか、楓よ？」

得意満面な顔が楓を窺うかがっている。

それを見た楓の脳裏に稲妻のように予感が走った。

もしかして・・・まさか・・・まさか・・・。

捜して捜して形見の品ひとつ見つけ出せなかった。

あれから、もう二年も経っている。

何度、諦めねばならんと自分に言い聞かせたことか。

生きているのか・・・本当に・・・？

信じても・・・良いのかっ！

唇が戦慄わななく。

どうしようもなく声が震える。

「それは・・・もはや・・・りんのことか!？」

気が付けば楓は邪見の胸元を引つ掴んで力任せに揺さぶっていた。

「グエツ・・・ぐっ・・・ぐるじい・・・はっ・・・離せえ・・・」

息も絶え絶えに抗議する邪見。

力を弛めはしたものの、それでも楓は邪見の胸元を掴む手を離しはしなかった。

「すっ、すまん、邪見！　だがっ、りんが生きているというのは真まことかっ!？」

「ほっ・・・本当じゃ！　とっ、ともかく、この手を離せっ!」

「何処だっ！　りんは何処にいたのだっ!？」

「・・・判らん」

ポツリと邪見が呟つぶやいた言葉に楓が噛み付いた。

「どういう事だ、邪見!? 今の今、お主が生きていたってはないかっ!」

「ええいっ! だから、それを今から説明してやるわい! とにか
く、この手を離せっ!」

ようやく楓から開放された邪見は、つい先日、西国で起きた事件に
ついて詳しく語った。

斯^かくして楓は邪見から反魂香^{はんこんこう}に纏^{まつ}わる話を聞かされ、りんが生きて
いる事を知ったのであった。

二年間、殆ど陽の射さない日陰のような楓の心境に久方ぶりに明る
い光が差し込んだ瞬間だった。

了

(後書き)

【一陽来復】：？冬が去り春がくること。新年がくること。？悪いことが続いた後に、ようやく良い方向に向かうこと。勿論、今回の作品は？の方の意味です。

【媪^{おきな}】：年取った女性。老女。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5837t/>

一陽来復

2011年7月9日04時52分発行